

## 報告Ⅱ要旨

### 渋沢栄一に入り込んだ＜思想＞とはサン＝シモンのそれだったのか

専修大学名誉教授（発表時専修大学文学部教授） 近 江 吉 明

#### はじめに

本報告では、帰国後の渋沢の行動を規定したのは「サン＝シモン主義」であったのかについて検証したい。分析に際し重視したいのは、渋沢本人の回顧録だけでなく、フランス近代史研究の研究成果、とりわけ、ナポレオン3世・第二帝政の政治史的解釈をめぐる議論である。さらには、19世紀西ヨーロッパの歴史的段階の歴史学的再確認によって、1867年のパリ万国博覧会での渋沢の見聞が、フランスだけではなく西ヨーロッパ全体の産業資本主義化のダイナミックな動きに規定されていたことにも注目したい。

果たして、1867～68年のフランスなどでの渋沢の体験を根本のところで支えた＜思想＞とはいかなるものであったのかに照準を定め見ていくことにしよう。

#### I、フランスでの渋沢の体験（1867～1868）

渋沢がフランス滞在において何に感動したについての言及は、彼自身の複数の体験録に見出すことが出来る。それらは、一種のカルチャーショックとも思えるものも含めると極めて多岐にわたっていることに気付く。しかし、様々な状況において繰り返されている体験として強調すべきは、渋沢の魂を根本のところで魅了している三つの認識である。

第一には、幕末の日本社会において渋沢が最も疑問に感じ、その悪弊に苦しめられていた「官尊民卑」の姿勢を徹底的に否定した近代フランス社会への感動であった。そのことを示しているのが次の発言である。「当時の日本はいわゆる階級制度であって、いやしくもその職に居ればいかなる無能な人でも威張って居て、当人も自己の無識愚昧を知らぬ。例えば諸藩の代官などという人にその領地の農民が会見すると、実に軽蔑される」（雨・219頁）と明快である。

こうした渋沢の思いは、徳川昭武一行の仏滞在時の世話役の一人であった「在仏日本名誉総領事・銀行家」のフリーリ＝エラルとの日々の付き合いの中で深まっていったのであるが、渋沢はそこでフランスの実態を随所において強調していて、それを一言で「国民全体が平等」だからだと得心しているのである。つまり、フランス革命の成果でもある人権や共和主義の重視の常識に心揺さぶられたのであった。

第二には、フランスの産業革命の成果への驚きである。それは、とりわけ重工業の発展に基づく海運・鉄道の成長に対するものであった。この点についての記録は日記や追想録において、日本を出港してからパリに到着するまでの間にも詳細に書き残されている。例えば「文物の富、器械の精はかねて聞き及んではいましたが、その実際を見て一段と驚きました。……そして水や火を使う、便利な仕掛けにはビックリしました。パリの地下はすべて水と火の道です」（「尾高新五郎への手紙」、秀雄・147～148頁）との言い方に表れている。

しかも、こうした鉱工業の発展やそれに基づいた社会的インフラの拡充を実現した産業資本主義の展開を支えていたのが、産業投資のための銀行と株式会社の役割にも気付いている。ここにもF.エラルという人物の影響を見て取ることができるが、彼は、「私はまたフランスで実業界の人々と接触したから、不十分ながらも銀行というものはどういふことをやるか …… 実物を取扱って少しは吟味して見もし、おぼろげに分かって居った」（雨・231～232頁）と言い切っている。

そうした渋沢の知見が、万華鏡のような空間で一挙にかつ体系的に開花したのが1867年のパリ万国博覧会だったのである。しかし、その時の近代科学技術の発展に対する驚愕の度合いは筆舌に表わしにくいほどだったことも隠していない。

だが、同時に渋沢は、さすがに、度量衡の統一や貨幣政策の充実といった国民経済の確立が産業資本主義の発展のベースにあったことを見抜いてもいた。

第三には、「自由帝政」下において、国家が国民に対し示した共和主義的側面への配慮に対する共感であった。まず、渋沢が反応したのは、社会事業・新聞事業の定着とその役割についてである。次の発言によく示されている。「私がはじめて新聞というものを知ったのは、慶応3年にヨーロッパ視察に行ったときのことで、…… このようにしてはじめて見た新聞紙というものは、小さいことは世間万事の出来事より、大きいことは国家の差し迫った重要問題に至るまで、いちいちこれを報道して世間一般に広く知らしめるという面白いもので、同時に非常に重宝なものだと思えました」（『竜門雑誌』、自伝・137～138頁）と強調している。

次いで、指摘できるのが、渋沢自身は恐らく見抜けなかったであろう「自由帝政」下にあったが故に花開いた「オペレッタ時代」・「ブルジョワ-ロココ」などの享楽文化への賛同である。この点について彼は「フランス皇帝帝催の観劇にお供した。…… 舞台の情景は、ガス灯を五色の瑠璃に反射させ、色を自由に映し出し、バレリーナの姿を引き立てたり、舞台の背景に雨の色、月光、晴れや曇り、明暗などを作ったりする。…… 鑑賞して驚いた」（『航西日記』、自伝・138～139頁）と思ひ出している。

以上、渋沢の仏滞在体験の中で彼に多大なる影響を与えたであろう3点にわたる認識をクローズアップしてみた。これらの体験のすべては、帰国後の渋沢のとりわけ経済政策や社会的活動の基本姿勢を根本のところまで支えていたことは言うまでもない。

## Ⅱ、第二帝政下に展開されたボナパルティズム思想の発露

さて、渋沢に多大な影響を陰に陽に与えた19世紀後半のフランスであるが、ナポレオン3世下の第二帝政の特徴を歴史学の土俵から正確に捉えておくことにする。この手続き無しには、渋沢が滞在した1860年代後半におけるフランスの政治・経済・社会の実態が見えてこないからである。

第一のポイントは、1860年代における「自由帝政」下のボナパルティズム独裁についての歴史的評価である。それらの評価の一つが、ナポレオン3世の下で産業資本主義が確立したという事実である。この動きは、渋沢の言う「実業家」の活躍（＝産業資本家の創出）した時代とも表現されるが、それは、フランス革命の諸成果の確認から始まらねばならない。というのも、フランス革命の結果、大ブルジョワジーを中核とした「資本制的国民経済」が温室的に育成された。決して、山岳派独裁といった政治史的な展開で終わったわけではない。それは、第一帝政、王政復古、七月王政、第二共和政を通しての産業革命へのプロセスでも同様であった。

そして、いよいよフランスは、第二帝政に突入し帝政という独裁制の「上からの」政策の下で、「対英後進国」にあったフランスをはじめて成熟せしめられた近代ブルジョワ社会に作り変えていった。つまり、フランスは綿織物や絹織物などの繊維産業などの経営者ではなく、製鉄業などを推進する大ブルジョワジーがフランス経済をリードするようになった。従って、ナポレオン3世の経済政策では、「産業人」の中の大ブルジョワジー（鉄道、海運、重工業、綿業などの諸部門）の優位が確立されていた。サン＝シモンの「産業人（les industriels）」とは違っていたのである。

そうした中で、ナポレオン3世の自由主義的な公共事業の試みも、とりわけ、産業革命下の労働力として重視された都市部の賃金労働者との力関係の中で模索されたものであった。

具体的には、オスマンのパリ大改造（都市再開発、道路整備、ブーロニユの森、ヴァンセンヌの森の建設、上下水道網の拡大、建物の高さ制限など）を実施させ、ロシュシュアル大通りには「ナポレオン労働者団地 Cité ouvrière Napoléon: 58, Bd. de Rouchouchouart」を建設させ、労働者のための低家賃共同住宅とした。託児所も併設したこの団地は、健康で住みやすい環境が提供されれば、労働者の生活は安定し、社会秩序も安定すると考えられたからであった（梅津「ナポレオン3世の経済改革」101頁）。

第二のポイントは近代銀行制度の整備である。表向きは資金不足に悩む中小ブルジョワジー向けに、手形割引の条件を緩和したパリ割引銀行および商工信用銀行を作って（1859年）、国と大ブルジョワジーしか相手にしなかった銀行改革を進めるものであった。つまり、それは、産業投資型銀行の設立（1852年）を担うことになった。それが、産業信用を興すための「不動産信用銀行 Crédit foncier」（1852年2月28日のデクレ）と「動産信用銀行 Crédit mobilier」を設立（1852年、「動産信用総合銀行として、ペレール兄弟によって発足）であった。他にも、ジェルマンによって作られたクレディ・リヨネ銀行（1863年）、信用を大衆化し、中小商工業者に役立つように意図されたソシエテ・ジェネラル銀行（1864年）が世間の支持を得て、大いに栄えた。

第三のポイントは、ナポレオン3世治下での近代国民国家の定着である。換言すれば、資本制国民経済の成立を温室的に育成した上からの政策の強要であった。具体的には、会社法改正で、株式会社の設立に際して、従来の免許主義を排して準則主義を採用した。この改革で産業資本は、新株や社債の発行によって、容易に資金の調達が可能となった。国は、会社の利益に対して法人税を課す形で関与し、「新会社法」（1867年7月24日の法律）では、株式会社の設立認可を廃止して、設立自由の原則を確立したのである。

もう一つの政策としては、国内の社会インフラの確立も重要であった。鉄道は1850年の3,600kmから1870年の23,300kmまで延長され、列車による乗客輸送は4倍、貨物輸送は10倍に達した。海上輸送量も、植民地拡大と自由貿易政策に刺激されて増加し、各港湾も整備された。そればかりか、首都パリの都市大改造は、リヨン、マルセイユ、ボルドーなどの地方都市でも進められ、上下水道やガス管の拡充、道路網の整備など、近代都市の社会インフラの確立が図られた。

第四のポイントは自由貿易体制への参入と植民地獲得の推進であった。上からの近代化の方向性を色濃くしていたといえる。その代表的政策が 1860年の英仏通商条約による保護貿易主義との決別である。これによって、フランスは輸入禁止品目の廃止など自由貿易の原則に転換した。その後、プロイセン、北ドイツ、イタリアなどと次々自由貿易協定を結び、西ヨーロッパの自由貿易圏を構築した。その結果として、イギリスの安価な工業製品が流入したために、国内の遅れた手工業

部門は淘汰され、帝政下の資本相互の抗争が激化し、資本の集中が進み、鉄道、金融、鉄鋼業、綿業などで大ブルジョワジーの優位が確立（河野健二ほか）。こうして、産業構造、金融体制、農業構造などフランス経済すべてにおいて貫徹されたボナパルティズムによって、大ブルジョワジー支配体制のもとでのフランス産業革命が完成したのである。

しかし、上からの急速な産業資本主義化の政策の中で、ルーシャプリエ法の廃止に見られるような増大しつつあった労働者側との一定の「妥協政策」を提示せざるを得なくなっていた。都市の工場労働者の急増、待遇改善問題の顕在化の中で、そうした労働運動の拡大に対応して、大ブルジョワジーや地域の名望家が資金を出し、自治体単位の「貧困者救済事務所」が設置されるようになった。これは、フランス革命期の国家予算による公的救済政策理念とは真逆のそれであった。したがって、現実には対応できないときには、公共事業による失業救済も行なわれた。また、自治体が共済のために特別税を課すこともあった（木下・105頁）。それでも、「帝国の共済組合」は、52年から72年までの統計を見ると、全国の共済組合数は2,488から6,139へ、加入者数は271,000人から913,000人へと増加した（田中拓道・134頁）。そうした流れの中で、「自由帝政」といわれるような労働者側への歩み寄りも見られた。つまり、団結権の復活を認め、裁判所の監視下でのストライキ権の創設（1864年）のような改良的政策を打ち出された。その結果、組合結成やストライキも増大し、また、第一インターナショナルのフランス支部が作られなどの状況変化が見えたが、1870年には炭鉱争議に軍隊が介入し死者が出るなど対立は激化した。

以上4点にわたる第二帝政期の歴史像は、渋沢のフランス認識の内容を特定する場合に有効である。

### Ⅲ、渋沢の認識に浸み込んだのはサン＝シモンの影か？

以上のような、歴史学におけるフランス第二帝政像をベースに、渋沢の思想や行動を規定した理念がなんであったのかを正確に見ていくことにしよう。

まずは、サン＝シモンが言うところの「産業人による、産業人のための、産業人の社会」を作るという捉え方であるが、渋沢の残した様々な発言に出てくる「実業家」という認識は、先にも指摘したように、農山村民、商人、手工業者、企業経営者などからなる「産業人」という意味合いとは大きく異なっていると言えるだろう。たとえば「実業家の品格を高め知識を進め、力を大にしなければ国家を富強にすることはできぬ」（百・111頁）との表現からもわかるだろう。

次に、サン＝シモンの「王様、貴族、僧侶、軍人（騎士）、官僚」といった人たちはいないという認識についてであるが、これも渋沢の体験とはかなりのズレがある。確かに、渋沢は、「ところがフランスにはそんな弊害はない。国民全体が平等で、役人だから威張るということがない。日本の従来の様子ではそうでない。日本のこのありさまは改善しなければならない。この風習だけは日本に移したいものであると深く感じた」（自伝・155頁）と言っているが、これは、例のフリーエール＝エラールとの付き合いの中で繰り返し強調しているところで、彼が言わんとしているのは「さらに一つ私の心を刺激したのは、商工業者の地位と官吏もしくは軍人との関係が日本とは全然相違して居ることであった」（雨・219頁）という部分で、先に注目したように、「国民全体が平等」との認識は、むしろフランス革命における身分制の廃止の成果に立脚したものの強調であることが明らかである。



さらに、渋沢の「物、人、金が動く」社会への絶大な期待と展望についてはどうだろうか。彼は、それについてF. エラールから学んだ「合本主義」、「株式取引所」、「有価証券売買」であると明言している。この自覚は、随所において繰り返され強調されている。たとえば、「余は銀行業者であったけれども、あらゆる方面に世話をやき、製糸業、保険業、鉄道業、海運業、あるいは紡績に織物に、あるいは煉瓦製造というように、その会社の設立及び経営に助力し、またある部分は、自ら担任もしてきた」（百・112頁）との述懐は、それこそ、「自由帝政」期の産業資本主義によって生み出された華々しい成果に対する憧れに学んだ結果なのだというを言外に吐露している。渋沢に大きな影響を与えたF. エラールの思想的背景がたとえ何であれ、ここに「サン・シモン主義」への渋沢の共感関係を見出すことは難しい。

また、救貧問題への渋沢の接近の仕方も、ナポレオン3世のロシア皇帝のために開催した競馬観戦の際の、ロシア皇帝によるパリ救貧院への寄付行為への共感に示されているように、社会に対する富豪の義務という慈善行為を前提としたものであった。それについても、彼は「初めて慈善市という事の性質が解り、成程之は博愛済衆の趣旨に適うて良い事であると感心した様な次第であった。…… 私はその当時日本に帰ったならば、是非ともそのような習慣を作りたいものと思ったのである」（青淵・上巻465～465頁）と振り返っている。これらのパリでの体験の背景にあったのは、すでに指摘したように、当時のフランスでは、大ブルジョワジーや地域の名望家が資金を出し、自治体単位の「貧困者救済事務所」が設置され機能していたという現実が存在していたということである。

### おわりに

以上の分析から明らかになったところを整理すると、渋沢と「サン・シモン主義」関係性が極めて希薄であることに気付かされる。言わずもがなのことであるが、フランス第二帝政期において、サン・シモンおよび「サン・シモン主義」が、社会思想として一定の影響を持っていたことは事実であり、ナポレオン3世下の「ボナパルティズム」にも紛れ込んでいたとの捉え方も可能である。しかし、それは19世紀フランス社会内部の動向として重視されねばならないとしても、あくまでもフランス近代史内の個別のことであって、仏滞在中および帰国後の渋沢に認識された「産業資本主義」像は、それとは関係なく意味を持ったのであった。

渋沢が最も感動した身分制をフランスが廃止したのは、フランス革命においてだった。そのフランス革命では、王権が崩壊し共和政となり、その中で、ブルジョワジーは政治権力と財政権力を獲得した。その後、第一帝政、王政復古を経てもブルジョワの主導権は揺るがなかった。その結果として、「権力に到達したブルジョワジー (bourgeoisie au pouvoir)」は、権力を手放すことはなく、いわゆる「200家族 (200 familles)」による支配が続いた（梅津博道・104頁）のであった。

このように渋沢が最も意気に思った「平等」な社会は、フランス革命によってもたらされたものであって、決して、サン・シモンや「サン・シモン主義者」によって打ち立てられたものではなかった。

従って、渋沢が無意識のうちに学んだのは、フランス革命の成果と、ナポレオン3世による「上からの」産業革命化のダイナミズムであったのである。

＜参考文献＞

- 1、渋沢栄一自伝（長幸男・校注）『雨夜譚』岩波書店、2018年。
- 2、渋沢栄一（守屋淳・訳）『現代語訳・論語と算盤』筑摩書房、2010年。
- 3、渋沢栄一『渋沢百訓 論語・人生・経営』角川書店、2020年。
- 4、河野健二編『フランス・ブルジョア社会の成立—第二帝政の研究—』岩波書店、1977年。
- 5、鹿島茂「サン・シモン主義と渋沢栄一」（『明治大学国際日本学研究』、第1巻第1号、2009年）。
- 6、関水信和「渋沢栄一における欧州滞在の影響—パリ万博（1867年）と洋行から学び実践したこと—」（『千葉商大論叢』、第56巻第1号、2018年7月）。
- 7、木下賢一『第二帝政とパリ民衆の世界—「進歩」と「伝統」のはざまで—』山川出版社、2000年。
- 8、同「フランス第二帝政史研究における新しい動向について—『新しい政治史』に向けて—」（『駿台史学』、第124号、2005年3月）。
- 9、梅津博道「ナポレオン三世の経済改革」（『北陸大学紀要』、第30号、2006年）。
- 10、田中拓道『貧困と共和国—社会的連帯の誕生—』人文書院、2006年。
- 11、サン＝シモン（森博・訳）『産業者の教理問答』岩波書店、2001年。
- 12、白瀬小百合「封建体制から産業体制へ—サン＝シモンの社会思想—」（『ヨーロッパ研究』、2013年1月）。
- 13、中木康夫『フランス政治史（上）』未来社、1975年。
- 14、松田昇「サン・シモンにおける『社会』概念」（『中京大学社会学部紀要』、1996年11月）。
- 15、Stuart L. Campbell, *The Second Empire Revisited; A Study in French Historiography*, New Jersey, 1978.
- 16、Maurice Agulhon (dir.), *La ville de l'âge industriel*, in Georges Duby (sous), *Histoire de la France urbaine*, t. 4, Paris, 1983.
- 17、Id., « Les paysans dans la vie politique », in G. Duby et Armand Wallon (sous), *Histoire de la France rurale*, t. 3, Paris, 1976.
- 18、Patrick Fridenson, « Le conflit social », Jacques Revel (sous), *Histoire de la France; L'Etat et les conflits*, Paris, 1990.